観光資源の文化の混在化を読み解く

～ボロブドゥールを事例として～

The analysis of the intermingling of the different culture of the tourist attractions.
Making Borobudur a case

中鉢　令兒*
CHUBACHI　Reiji

近年急速に経済成長を続けるインドネシアは、86%が回教徒(UNS:2008) という国であるが、その歴史的背景から、中近東とは異なった寛容性のある回教徒が多い。その背景には、ヒンドゥー教、仏教という 2 つの世界遺産の観光資源を持っていることからも、他の宗教への理解、容認の土壌がある。こうした国柄を、理解するのは重要であり、インバウンドの視点からも不可欠である。本稿は、仏教世界遺産であるボロブドゥールを、現地調査と文献調査を踏まえた調査論文である。ボロブドゥールが、ヒンドゥー教の多くのモチーフを転用しながら仏教の教えを大衆に伝達しようとした痕跡を明らかにした。この転用の具体的事実は、寛容性のあるインドネシアの国民性を形成している基盤と指摘できよう。こうした文化理解は、2 億人を超える人口を有するインドネシアのインバウンド観光に、寄与できると考え研究の目的とした。

キーワード：ボロブドゥール、文化の混在化、ヒンドゥー教

1　はじめに

インドネシアは、約 1 万の島からなる、島嶼国家である。また現在約 86%が回教であるインドネシアは、古都ジョグジャカルタに 2 つの世界遺産に登録され観光資源がある。一つは殆ど信者のいない仏教遺跡であり、他もバリ島以外には殆ど信者のいない、ヒンドゥー教の遺跡である。この遺跡の建立は、ともに 10 世紀前後の遺跡と推定されている。この 2 つの宗教の繁栄時期は、その時代の王朝の経緯より、にジャワ島中央部に 2 つの宗教が拮抗して繁栄していた。しかしボロブドゥールとその周辺を詳しく見ると、仏教とヒンドゥー教のモチーフが混在している点が随所に見られる。ジャワ島中央部で急速に広がり急速に衰退したインドネシア仏教文化の初期段階の未成熟さと推測され、ヒンドゥー教のモチーフとの混在状態の実態を明らかにするとともに、観光資源としての真正性の一助となることを目的としている。併せて、A.シュッツが、「生活世界との何らかの文脈なしでは、理解が難しい」といった指摘をどう解決していったのか？を検証したい。また、6 ～10 世紀に建立したと言われている修行寺院石窟群エローラ(西インド)が、仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教が独自の宗教的モチーフによって創られている。この差異は、「生活社会との浸透度を示すもの」「修行の場と啓蒙的な場との違いか」「政治支配に活用された特徴か」といった点も今回の調査の範囲で結論づける。合わせて、寛容性の高いインドネシアの国民性を理解する中で、経済の発展が著しく 2 億を超える人口のインバウンド観光に寄与することを目的としている。

＊北海商科大学

２　調査の概要

本研究は、2017 年 8 月 12 日から 18 日までジョグジャカルタにて調査した結果に基づいている。インドネシア文化の事前調査は、国立博物館、ジャカルタ歴史博物館で 8 月 10～12 日を当てた。またにボロブドゥール周辺は、16,17,18 日の 3 日間、プランバナンと中央ジャワ島文化・史跡に関しては、12,13,14,15 日 4 日間を充てた。ボロブドールに伝播した基となる西インドの調査は、2017 年 12 月 27 日から 2018 年 1 月 8 日に実施した。

３　石窟寺院群エローラにみられる聖人像の差異と宗教

2 つの宗教の聖人像は、ヒンドゥー教の「動」と仏教の「静」に大別される。すなわち単純に要約すると、様々な矛盾と戦う荒ぶる神のシヴァと自然の摂理を解釈して悟りを求める仏陀である。また、仏教（小乗仏教）と同時代にヒンドゥー教から派生したジャイナ教は、簡素を旨としているので、冠、着衣はないのが特徴である。差異の理解は、各宗教の聖像の差異（写真 1,2,3）で明らかに判別できる。その究極の目的、理想がわずかな示唆で、観光客という一過性見学者にもわかる内容である。しかしその周辺の装飾が、時として曖昧なメッセージを伝える原因となる点をは本稿では指摘する。

写真１　戦うヴァシュヌ

写真２　龕中の仏陀

写真 3　ジャイナ教の聖者

４　ボロブドゥールと旧参道寺院

(1)　旧参道の指摘

旧参道は、千原大五郎、伊東照司らが指摘しているようにムンドゥ寺院からパオン寺院を経てボロブドゥールに至る道である。しかし現在は、この参道は、消失しボロブドゥール周辺のみの存在となっている。この 2 つの寺院を見学しボロブドゥールを見学するためには、工学的に能率化された曲線の道路を利用する事となる。したがって、両寺院の目的意識を持った観光客は見学に訪れるが、ボロブドゥール見学者の少数に過ぎない。両寺院の特筆すべき点は、当時の宗教的背景を理解するためには、重要な場所である。ムンドゥ寺院の 3 体の仏像の完成度は、ボロブドゥールの仏像群以上の出来栄えで、仏教芸術の完成度の高さと表現技術の洗練した点を示している。他方パオン寺院のレリーフは、ヒンドゥー教の宗教装飾の表現言語をベースにしていることから仏教の過渡的時代を推測させる。この 2 つの寺院の事前見学は、当時の参拝者も同様であったと思うが、ボロブドゥールの当時の仏教の啓蒙時期と成熟時期とを示しているものと指摘される。それを裏付けるように、デュマルセ博士は、「ボロブドゥールは、シヴァ神のリンガを祀った聖堂」（1978）であった見解を示し、その見解を予見する見学の場所として、重要であると指摘できる。

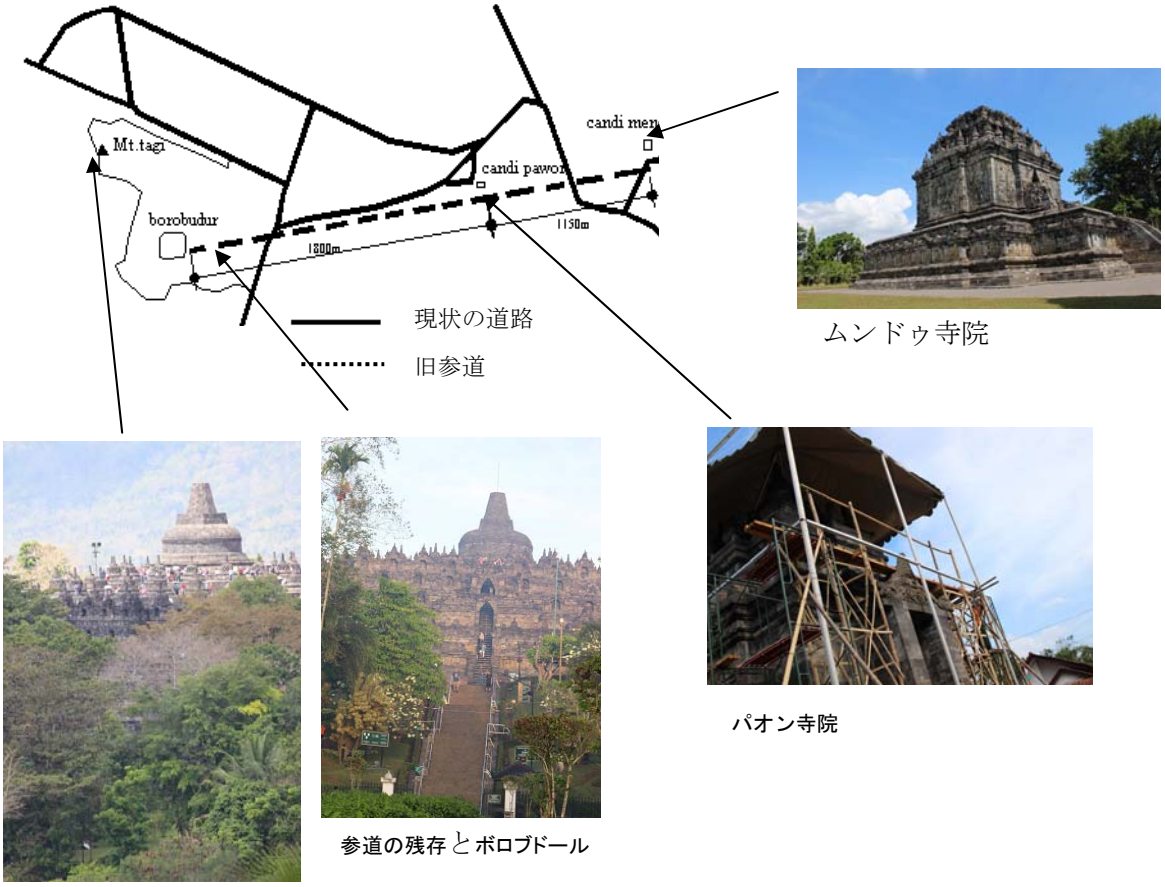

図１　ボロブドゥール旧参道と寺院群

(2)　ムンドゥ寺院

ボロブドゥールと同年代とされるムンドゥ寺院は、3 体の仏像の完成度がボロブドゥールの仏像以上である。中央の釈迦如来像は、顔の表情も微細に表現がされておりその技術的精度の高さが示される。また手元の表現は、転法輪印を結び釈迦牟尼仏の意志を示している。両側の控えの左の観音菩薩、右の金剛手観菩薩も同様に精度が高く、ボロブドゥールの仏教への啓蒙的要素ではなく信仰の高徳を示している。しかし入口のレリーフ 1 側面は、仏教とは異質なヒンドゥー教の神である多聞天が、仏法を守護し福徳を授ける毘沙門天と変形されその逸話が示されている。また他の側面には、安産や育児の神として信仰のある鬼子母神のレリーフがある。しかし法華経護持の神でもあるこの像は、左手で 1 子を添え、右手には後世では吉祥果言われる樹木を捧げているがここではヒンドゥー教の聖具ホラ貝を持っておりヒンドゥー教との混在化もみられる。何れにせよ、成熟したヒンドゥー教の約束事が随所に観られる仏教施設であり、ボロブドゥールの啓蒙的、布教的要素は、ヒンドゥー教の象徴的記号によって意味づけられ仏教の教義の一部を形成するに至っている。N.J.Krom によれば、シャイレンドラ王朝によって急速にこの地域に仏教が興隆した 8 世紀中葉期と指摘され、入口のレリーフから、教義の解説を意味する独自の細部の表現の共通理解は確立されていないと判断できる。他方 5 世紀にジャワ島には、インド人の移民が相当数存在していたことが晋僧法顕（413）によって記録されている。

写真４　中央の釈迦牟尼仏

写真５　転法輪印を結ぶ手先

写真６　毘沙門天　天国の木カルパタールが見られる（ヒンドゥー教の聖木の転用）

写真７　鬼子母神像
（ヒンドゥー教の聖具のホラ貝が認識できる）

(3)　パオン寺院

一説には、王の墓とも言われている 820 年代のパオン寺院だが、地震の倒壊による修復が進められていた。したがって現在、全容の検証は不可能で、レリーフで著名な外側面天界の樹カルパタール（写真８）は、中心に上部の 2 人の天人と下部に右に、頭が人で胴体は鳥にのキンナラ（男性）が描かれている。左像は、キンナリ(女性)と言われているが損傷が大きく判別が出来なかった。このカルパタールのモチーフは、プランバナン寺院のシヴァ堂のレリーフにも視られ、ヒンドゥー教とのレリヴァンスが確認できる。さらに天界の樹のカルパタールの簡略化がみられるが、そ

の構図は、ヒンドゥー教の形式が踏襲されている。差異の点として、鳥が天人となっている点である。ここから類推されるのは、当時の人は、ヒンズー教的生活世界と仏教的世界が混在し、ヒンドゥー教から新しい教義を開き仏教はその中で独自教義（サドウの追及する解脱の聖と俗の中道の教え）を浸透していた時代と思われる。それは、ボロブドゥール研究家スリランカのパルナヴィタネ博士やフランスのデュマルセ博士の研究からも指摘できる。デュマルセの研究では、ボロブドゥールの第一期工事では、シヴァ神のリンガを祭る聖堂を作ろうとしたと思われる形態であると指摘している点からも、明らかである。何れにせよ、一般大衆の生活世界は、ヒンドゥー文化がコード化されて、仏教がそのコードを活用して布教を進めていた時代であると指摘される。

写真８　パオン寺院の外壁のレリーフ

写真９　外壁のレリーフの詳細天界の樹とキンナリ

写真 10　プランバナンのシヴァ堂の天界の樹のカルパタールとキンナラ（男）とキンナリ（女）のレリーフ

５　ボロブドゥール

(1)　建築の創建と変遷

ボロブドゥールの建設については、デュマルセ博士の研究（1978）で、第 1 期 780 年前後、2 期は 792 年前後だがその間に工事の停止期間があったと指摘している。第 3 期は 792 年前後としている。第 4 期は、824 年前後、５期が 833 年前後としている。デュマルセに由れば、第 1 期はヒンドゥー教寺院として建設されていた時代との指摘がある。その指摘は、2 点から支持できる。

１点目はその位置である。ヒンドゥー教の寺院は、周辺から見ると小高い丘が聖なる場所として選ばれる。ヒンドゥー教寺院が保存信仰されているネパールのヒンドゥー教の真正な場所は、周辺の高い丘である。この例からボロブドゥールの位置は小高い丘陵に建設されている。２点目は、ボロブドゥール発掘の折掘り出された、牛に乗るヴァシンヌ神、座るガ―シャ像とヒンドゥー教の神がボロブドゥール考古学博物館に保存されている事からも明らかである。さらに隠された基壇部分では、因果応報が主要テーマでありヒンドゥー教の重要なテーマである。また、伊東は、デュマルセ博士の研究を踏襲し、ボロブドゥールを形状と内容から３つの区分で要約している。『「方形基壇部」「円壇部」「仏塔部」[1]としている。そして、その内容を「方形基壇部」を仏教経典を基にした説法のレリーフ、「円壇部」には 72 基の仏塔が配置され中には、座った仏像が納められている。「仏塔部」は、直径 9.9m、高さ 10mで内部は現在不明（要約)』としている。すなわち、旧基壇部分のレリーフが、全体の文脈とは不連続である。

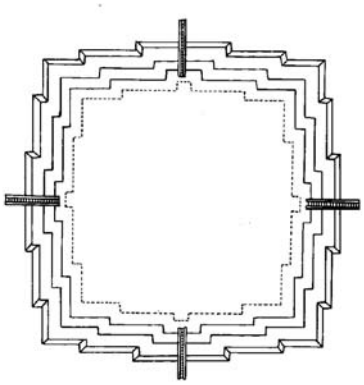

図 2　第１期平面図（Dr.Jarques Dumarcay による）

写真 11 ボロブドゥル公園内タギ丘陵から

写真 12　牛に乗るヴァシンヌ像
(ボロブドゥル考古学博物館)

写真 13　ネガ―シャ像
(ボロブドゥル考古学博物館)

(2) 隠された旧基壇部分

1885 年に発見された第一回廊の下に位置する旧基壇は、未完のまま放置されその上に現在のボロブドゥールが創られた。この旧基壇は、ボロブドゥールの初期の建設時期を推定するのに、重要

は役割を果たした。工事の未完により指示がサンスクリット語とカウイ語で未刻の箇所にのこされその字体は、847 年の碑文以前のものと断定された。旧基壇は、一部がみることが可能であるが、主としてヒンドゥー教の教義である固執、欲望、怒り、迷妄、破滅の負のスパイラルがテーマであり、旧基壇工事時代には、ヒンドゥー教寺院として計画されていたとデュマルセ博士、パルナヴィタネ博士（1970）が指摘している。

写真 14　旧基壇部の欲界（因果応報）レリーフ

(3) 方形基壇部

伊東は、「方形基壇部」は、仏教経典を基にした説法のレリーフと要約しているが、本稿では、観光資源化されている代表的な部分に留める。

第一回廊(現基壇 1 段目)は壁面が上下 2 段で、上段が仏陀の生涯を示しているもので、伊東の論文では、下段は釈迦の前世の物語と述べている。

写真 15　サドウに悟りを説く仏陀(上段)

写真 16　マーヤー婦人の胎内に白象（釈迦の化身）の降臨

写真 17　四門出遊

写真 18　南門の病人

写真１９　菩提樹の下で悟りを開く

したがって、大乗仏教に精通していない多くの観光客は、上段のレリーフ中心に拝観することになる。特に西面の仏教の原点である仏陀の四門出遊(写真 16)が表現も解りやすく集中する。東門の老人、南門の病人(写真 18)、西門の死人、北門で僧侶に出会い、人生の苦を知り出家に至る。さらに右に回ると、北面の「菩提樹の木の下で悟りを開く」(写真 19)を経て、初説法のレリーフでマーヤ夫人の受胎(写真 16)に戻る。

第 2 回廊から第 4 回廊(現基壇 2 段目～4 段目)は、初期大乗仏教の経典「華厳経」の「入法界品」が題材とされている。青年スメーダ（善財童子）が文殊菩薩の導きにより 53 人の賢者を訪ね、教えを受けながら諸国を旅する内容で、悟りを開くまで続く燃灯仏受記の物語りである。

写真 20　善財童子が賢者シヴァ神[2]を訪問(第 2 回廊)

(4)　ヒンドゥー教、仏教、回教の移行

東南アジアは、偏西風による文明移動の十字路であった。文明が深く根を下ろした背景には、偏西風の風の逆風が吹くのが、半年ごとのサイクルであることに由来している。最初にインド文化の影響を強く受けている。初期ヒンドゥー教、続いて仏教が伝播した。中国の唐時代の陸のシルクロードが安全でなくなった時期を境に、海路が発達をした。当時の航海技術は、アラ

ビア人が優れており主として運送業は彼らが担っていた。この時期に彼らの宗教である回教がインドネシアに伝播した。14 世紀末ごろからジャワ島を中心に生活の中に浸透しはじめ、15 世紀には圧倒的勢力を示した。ヒンドゥー教、仏教は衰退し芸術文化も忘れられた。しかし、ヒンドゥー文化コードは、現在までワヤン(影絵芝居)を核に継承されてきた。ワヤンは、主にラーマーヤナを題材としており根底には化身思想に裏打ちされている。化身思想は、ヒンドゥー教の生活世界に影響を与えている。他方オランダの植民地時代(オランダ東インド会社創立：1602)に至る長期にわたる回教時代にイスラム文化の遺構は残されなかった。その背景には、当時の豪族を中心とする為政者たちが、ヒンドゥー教のカースト制度が都合よく、イスラム教に否定的だった点が挙げられる。その後のオランダの統治時代を拝察すればその点は理解でき、それは、バリ島のオランダ植民地時代の政策でも明らかである。

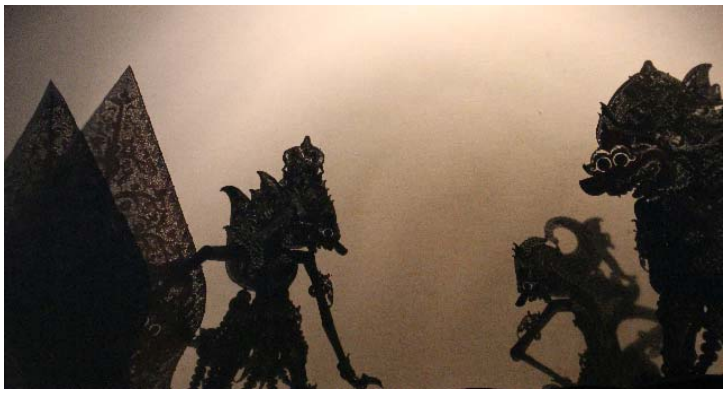

写真 21　ラーマーヤナがワヤンで上演される

6　まとめ

インドネシアのボロブドゥールの第 1 回廊を中心に考察を加えたが、A.シュッツの指摘のように新しい文化は、従来から続いてる文化コードとの繋がりなくしては、理解が難しく大衆化は難しいと考えられるが、ここでは以下の点が明らかになった。

① ボロブドゥールは、その痕跡から旧基壇建設当時はヒンドゥー教施設として計画されていた。

② インドネシアのボロブドゥールは、ヒンドゥー教が地域で根付いていた中で、新宗教の仏教が大衆化を奨めた施設である。この施設は、新宗教の根幹は、変えることなく伝えているが、その装飾的部分は、見慣れたヒンドゥー教の文化コード（形態）でまとめている。

③ 西洋文化では、創造的文化の形成は、創造的破壊が主題と視えるが、東南アジアでは、大衆が解釈の手掛かりと旧文化の記号化された意味を活用している。従って滅びた文化の潮流を探るとき細部の記号は重要な手掛かりとなる。

④ 伝統的大衆芸能は、滅びた文化の痕跡がみられる。すなわち、大衆芸能として過去の異文化のコド一化を守ることが、持続的観光資源の保存の有効な方法と指摘される。

本論では触れてなかったが、東南アジアの遺跡の多くがヒンドゥー教から派生した仏教であるが故に遺跡も時代変容があり、観光対象として理解が難しい点も多々存在する。更に大乗仏教と小乗仏教の差異も存在する。こうした絡み合った東南アジア文化とその痕跡として残る多くの遺跡を紐解くきっかけとなれば幸いである。

付記[3]

ヒンドゥー文化の調査は、インドⅠ（デリー、ジャイプール、ガルタ、ハルドワール）: 2016.12.28～2017.1.8、インドⅡ（ムーンバイ、アウラターバード）2017.12.26～2018.1.8

ヒンドゥー、仏教混在文化は、インド、およびインドネシア(ジャワ、ジョグジャカルタ)2017.8.10～24、ネパール(カトマンズ盆地)2016.8.9～22

註

[1] ボロブドール（1998)、伊東照司、山川出版、P47

[2] 仏陀の左側にシヴァ神の象徴の三叉戟が視られる。

[3] 本論文中の写真は、すべて筆者の調査で撮られたものである。

参考文献

1. 金子史郎、金子民雄（1984)、ボロブドールの滅んだ日、胡桃書房
2. 千原大五郎（1969)、 仏蹟ボロブドール、ヒンズー・ジャワの建築芸術、原書房
3. 宮崎恒二、山下晋司（1993)、 アジア読本「インドネシア」、河出書房
4. P.モルトン　（邦訳：長谷川章）(2002)、パリ植民地博覧会、星雲社
5. Jacques Dumarcay, Soekmono（1990）,Borobudur: A Prayer in Stone, Thames & Hudson Ltd
6. 田枝 幹宏 、伊東 照司（1998)、ボロブドール、山川出版社
7. 千原 大五郎 (1970)　ボロブドールの建築 、原書房
8. 佐藤 宗太郎（1977)、エローラ石窟寺院、佐鳥出版

（2018年2月26日受理）